



賭博にのめり込む精神疾患「ギャンブル依存症」の患者を受け入れる西日本初の回復施設「セレニティーパークジャパン」が4月、奈良県大和高田市でさる。施設長の三宅隆之さん(36)は依存症を克服した一人。「かつての自分のように苦しむ人を助けたい」という。

(稲垣収)

三宅さんがパチンコを知ったのは、福島の大学の1年だった時。志望大学に入れなかった敗北感を引きずっていた。空っぽの心を埋めたのがパチンコ。先輩の誘いで初めて行って数千円勝った。「ドキドキ感」が忘れられず、授業そっちのけで玉

ギャンブル依存症 助けたい

4月、奈良に西日本初の拠点

を打ち続けた。

卒業後、同県内で念願のラジオ局ディレクターになったが、仕事のストレスがたまることパチンコはエスカレートした。給料を使い果たし、消費者金融へ。それでも足りずに制作費を使い込み、退社に追い込まれた。

何度もパチンコをやめようと思っては、考えた。へいつでもやめられる。その前に負けを取り返そう。△勝って返せばいい△と思うと人の金を盗む罪悪感がなくなっていく。

東京でラジオ局に再就職したが、金券や現金約200万円を横領するなどして窃盗容疑で書類送検され、懲戒解雇。次に勤めた番組制作会社も、会社の金を着服してクビになった。その間にパチンコで膨らんだ借金は約2000万円になった。大半は両親が肩代わりしてくれたが、母は「頼むから死んで」と、泣いた。

3度失職の男性 克服し施設長に



ギャンブル依存症者の自助グループの運営を主催する三宅隆之さん(大和市阿倍野区)＝宇那木健一撮影

2006年7月、横浜市の回復施設に入所。そこでは同じ境遇の者同士で互いの過ちをさらけ出し、徹底的に自分を見つめ直した。

「それまでは周囲に対してずっと何かのウソをつけているような生活だった。正直になれば、パチンコに頼る気持ちが薄れ、犯した罪の重さに気が付いた」

半年後、横浜市の司法書士事務所へ就職。解雇された会社の元上司らに謝罪して回った。今も着服金の返済が続く。「仲間」の役に立つことが、自分のプラスにもなる」と考え、各地で自分の体験を語った。

昨年10月、奈良県の薬物依存症者支援団体「奈良ダルク」が、ギャンブル依存症などの人たちの施設を開設するにあたって、協力を頼まれた。

ギャンブル依存症は世界保健機関(WHO)が認定する疾病で、国内の依存症者は予備軍を含めて約200万人とする推計もある。だが、薬物依存などと違い、認知度は低い。三宅さんは「病気が、意志が弱いから」と済まされがち。犯罪や自殺に至る前に、生きる力を与える場を提供したい」と話す。

同施設の開設フォーラムが4月2日午後1時から、奈良県新公会堂(奈良市春日野町)で開かれる。無料。問い合わせは、奈良ダルク(0745・22・0207)。